

# 中島敦『光と風と夢』論

— ゴーギャンと『ノア・ノア』を中心に —

郭 玲 玲

## はじめに

『光と風と夢』はイギリスの小説家ロバート・ルイス・バルフォア・スティーヴンソン (Robert Louis Balfour Stevenson) が南洋サモア島における晩年生活を描いた作品である。中島敦は昭和17年3月に南洋から帰国後、『文学界』編集部の要求に応じ、題名『ツシタラの死』を『光と風と夢』に変更し、また原稿の一部を短縮した。改題された作品は、『光と風と夢—五河荘日誌抄』という題名で昭和17年5月号の『文学界』に掲載された。

『光と風と夢』の創作とゴーギャンとの関係についての先行研究は、洪瑟君<sup>(1)</sup>と岡谷公二<sup>(2)</sup>が挙げられる。

まず洪瑟君は以下のようにゴーギャンをはじめとする印象派の画家たちの表現法が中島敦に影響を与えたと認めている。

「光」とは作品に描写されている印象派の光であり、抽象的に言えば、「光」は中島の〈南〉への憧憬と植民地に対する啓蒙しようとする意図であった。(中略)「光と風と夢」における「光」は、巧妙に十九世紀後半の時代背景を表していると同時に、密かに中島自身の「夢」をも含んでいるのである。

(中略) ゴーガンのみならず、十九世紀の末、スティーヴンソン、ハーン、ロティなど、西洋の作家や画家たちは、工業革命によって生まれたヨーロッパの灰色の年から逃げ出し、〈南〉へ明るい楽園を求めて行った。それは一種のエキゾチシズムの表現であろうか、彼らの文章や絵画によって、〈南〉は常に明るくて美しい楽園というイメージが構築された。それ故、英文学を博覧した中島も自然と彼らの影響を受け、〈南〉が未開で、原始的な美に満ちている明るい場所だと深い憧憬を持つようになった。

洪の指摘とほぼ同時期に、岡谷公二はゴーギャンをはじめとする「南洋行の系譜」を提出し、西欧の画家・文人たちと日本人の画家・作家たちの南洋行を考察し、その延長線上に中島敦の南洋行を位置付けている。

洪は「明るくて美しい楽園というイメージ」を構築したゴーギャンを評価し、また「中島敦『マリヤン』論」<sup>(3)</sup>において、南洋の島民を主人公とした『マリヤン』の創作はゴーギャンの『ノア・ノア』<sup>(4)</sup>の影響を受けたと指摘している。

南洋に行く前に脱稿した『光と風と夢』と中島敦の南洋行はゴーギャンの影響を受けたといえる。さらに、ゴーギャンの『ノア・ノア』を考察した結果、そこに描写された南洋の素朴な生活や原始的な信仰などは『光と風と夢』と相似している。これにより、『光と風と夢』の創作はゴーギャンだけでなく、その文学作品『ノア・ノア』にも影響されていると考えられる。

したがって、本稿では、従来の先行研究であまり触れてこなかったゴーギャンの『ノア・ノア』を手がかりに、ゴーギャンと『ノア・ノア』が当時の日本で如何に受容されていたかについて考察する。これにより、『光と風と夢』の創作とゴーギャン及びその『ノア・ノア』との関連を明らかにしたい。

## 一 日本に伝わってきたゴーギャン

南洋に赴き、創作活動をしていた芸術家たちの中でも、南洋を楽園として描き上げ、そこに生の意義を問いかけるゴーギャンはもっとも代表的である。

ゴーギャンは1891年6月に念願のタヒチへ渡った。そこで土人の娘テフラと結婚し、二年間ほど幸福な生活を送っていた。1893年に「やむを得ない家庭の事情」のため帰国する前のゴーギャンはタヒチを以下のように賛美する。

さやうなら、情深き土地よ、心よき土地よ、美と自由の国よ！私は滞在二年余のうちに、二十年も若くなり、来た時よりも遥かに「野蛮」になり、然し遥かに賢くなつて帰つて行く。さうだ。野蛮人達は、この年老いた文明人に、実に多くの事を教へてくれた。この無知なる人々は、生きて行く術を、そして幸福になる方法を教へてくれた。

### — 『ノア・ノア』第六章

本江邦夫はゴーギャンの「タヒチ時代の肖像画には、人間存在の深淵までのぞきこむような傑作が多い」<sup>(5)</sup>と指摘している。このノア・ノアにあふれるタヒチは、ゴーギャンに精神上の影響を与えた。タヒチに対して名残惜しさを抱きながらフランスに帰ったゴーギャンは、1895年9月に永住を決意して再びタヒチに渡航した。1901年8月、彼はヨーロッパの文明によって腐敗しつつあったタヒチに見切りをつけ、タヒチの北東1500キロにあるマルキーズ諸島のヒヴァ・オア島に移った。

タヒチに比べると、ヒヴァ・オアはまだ未開の地、原始のエネルギーに満たされた土地だった。野蛮人であるはずのゴーギャンもしばしば恐怖を感じる時があった。<sup>(6)</sup>

人食い人種がまだそこに住んでいるヒヴァ・オア島において、ゴーギャンの生活はタヒチ時代ほど幸福ではなかった。その間、彼は自殺を図ったが、失敗した。南洋での苦しい生活を送りながら帰国しなかったゴーギャンは、1903年5月8日にヒヴァ・オア島で客死した。<sup>(7)</sup>

身を以て芸術活動を行ったゴーギャンと彼の作品は、ヨーロッパだけでなく、日本にも影響を及ぼしてきた。明治43（1910）年1月創刊の雑誌『白樺』はその第一巻第二号（1910年2月）においてすでに後期印象派、とりわけゴーギャンとゴッホを紹介し、ゴーギャンの「タヒチの女」が口絵として掲載されている。その後、ゴーギャンをはじめ、ゴッホ、マティス、セザンヌなどの後期印象派画家と彼らの作品は『白樺』に載せられ、西洋美術の動向として紹介されている。

#### <『白樺』に登載したゴーギャンの作品>

巻号	年月	作品
第一巻第二号	1910年2月	「タヒチの女」
第三巻第一号	1912年1月	「マルケサス島にて」「白き馬」
第三巻第六号	1912年6月	「現の化性」
第三巻第十二号	1912年12月	「自画像」
第四巻第四号	1913年4月	「偶像」（彫刻）
第十三巻第十号	1922年10月	「風景」
第十四巻第三号	1923年3月	「自画像」「マルケサス島にて」「偶像」

絵画作品の他に、小泉鉄訳のゴーギャンの文学作品『ノア・ノア』は明治45（1912）年1月の『白樺』（第三巻第一号）から大正2（1913）年11月（第四巻第十一号）にかけて連載されていた。

後期印象派は日本に紹介された時、美学者柳宗悦は『白樺』（第三巻第一号）に彼らを「革命の画家」と呼び、詳細に後期印象派の技法、理念及び代表的な画家—マネ、モネ、セザンヌ、ゴッホ、ゴーギャンなどを紹介している。

若し後印象派とは如何なるものであるかを尋ねるなら、答へは明白である。—汝が抛る可き唯一の王国を汝自身の裡に見出し、其旺溢せる全存在を真摯に表現し様と思ふならば、汝は既に後印象派の氣息に於て活ける人である。而して一切の物象が汝に於て生き、汝を一切の物象に於て見出し、汝の全人格が自然の全実在と一つの韻律に流るゝ時、残るものは永遠に肯定せられたる汝自身の生命である。此人生の肯定充実こそはやがて後印象派の絵画を産

める力である。<sup>(8)</sup> (下線は筆者より、以下同)

後期印象派の作品は柳から見れば人生を肯定し、充実させるものである。この人生への肯定は、存在の不確かさに苛まれていた中島敦に欠けているものであり、彼が一生をかけて追究していたものと言える。

後期印象派の代表であるゴーギャンについて、『白樺』第三卷第六号は彼の作品「現の化性」を載せている。この絵に画かれた女はゴーギャンがタヒチでめとったテフラである。下向きにベッドに寝ている彼女は慄く表情にみちて何かを見つめている。ベッドの後の左の方には魔鬼の半身が書いてある。この絵に画かれた内容はゴーギャンが生活していたタヒチの伝説によるものである。その伝説によれば、眠れない夜には魔鬼が多く襲う。テフラは夫ゴーギャンの帰りを待っていた夜の寂しさに堪えられず眠れなかったのであろう。この作品とゴーギャンについて「記者」と署名した人は以下のように解説をしている。

幾多の絵に於ても、ノア・ノアに於ても見られる様に、ゴオカン是一个の詩人であつた、彼は絶えず美に憧れ、偶像を慕つて、偽多い文明を嫌つては遠く海を越えて遂に身自ら南洋の風土に化した、彼にとつては蛮民の群像にさゝげる祈りには偉大な意味があつた。彼の心にはたえずかゝる元始の宗教を慕つたあとが見える。そして彼等の間に行はれる無垢の伝説は常にゴオカンの心に詩を産み美を作つた源であつた。本号に入れた挿画は常に絵としてのみならず、其由来に於ても又よくゴオカンの心情を物語る絵の一枚と思ふ。<sup>(9)</sup>

ゴーギャンは単なる一人の画家としてのみでなく、彼の著書『ノア・ノア』が日本語に翻訳されたことによって、「一個の詩人」として崇められている。ことに、ゴーギャンの南洋行と南洋を題材にした作品は当時の日本だけでなく、世界中の人々、即ち文明社会に生きていた人間たちに大なる影響を及ぼした。絵画で伝えられたのは、世間で知られている南洋の野蛮性ではなく、南洋の「蛮民」に代々伝えられた伝説とその偉大さである。

『白樺』のほかに、『現代の洋画』は1913年8月に「後期印象派」というタイトルで特別号を出し、C.ルイス・ハイントの『後期印象派たち』(The Post Impressionists)、ユリウス・マイヤー＝グラフェ著『近代美術の展開』(The development of Modern Art)のなかの「ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ」や「ポール・ゴーギャン」などの翻訳を掲載する一方、ヴァン・ゴッホとポール・ゴーギャンについての岸田劉生の文章も掲載した。<sup>(10)</sup>

『白樺』などの雑誌は大正初期に後期印象派をはじめ、西洋美術の普及活動に努めていた。柳宗悦の『革命の画家』に代表されるように、人文主義、理想主義の影響を受けた『白樺』同人は純粹な美術史上の紹介ではなく、全面的な画家像を築き上げようとした。

特に武者小路実篤が進めた人間性、画家の人生や人格に的を絞ったアプローチのしかたは、作品を本来の西洋美術史の流れに位置付けるのを妨げるばかりではなく、一部の画家の悲劇的な側面を（ヴィンセント・ヴァン・ゴッホやポール・ゴーギャン）、または卓越した力（オーギュスト・ロダン）を強調する結果を招き、しかもそれが容易に一般大衆に広まっていった。ポール・セザンヌ、ヴィンセント・ヴァン・ゴッホやポール・ゴーギャン、そしてもちろんオーギュスト・ロダンらの後期印象派の画家（「後印象派」という語を『白樺』の同人たちは使い、後期印象派のなかでもとくに主観を重視した画家たちの表現主義的傾向をさした）は、ある意味で西欧崇拜精神にかわる人間の天才の象徴となった。<sup>(11)</sup>

しかし、当時の日本では後期印象派などの絵画作品は実物が少なく、雑誌の挿画や複製、版画<sup>(12)</sup>などが多かった。

実際目にするのできる実物が少なかったために、日本人の知識人は西欧の作家に対して批判精神を働かせずに、理想化してしまう傾向にあった。こうした姿は現在でもまだ見受けられ、日本の大衆にとって、ゴーギャンやゴッホなど何人かの画家の名はほとんど神話的効力を発揮している。歴史的に重要であるにもかかわらず、日本で1冊も出版物がない画家がいるいっぽうで、こうした花形の画家については膨大な量の美術書籍が出版されていることも、この神話現象を裏付けている。<sup>(13)</sup>

これによると、当時の日本に於いて、ゴーギャンは人生肯定の後期印象派の画家であり、タヒチの無垢な伝説に美を発見して偉大な作品を創作したと認めていた。

ゴーギャンの作品は日本において初めて展示されたのは大原コレクションであった。上述した岡部あゆみの考察によると、1923年8月、大原コレクションの「第三回泰西名画家作品展覧会」は開催され、ポール・ゴーギャン『かぐわしき大地』、グレコ『受胎告知』、ミレー『グレヴィユの断崖』などが展示された。

## 二 日本における『ノア・ノア』の翻訳と影響

『ノア・ノア』はゴーギャンが友人シャルル・モリスのすすめにより、タヒチの生活に基づいて書いた旅行記である。上述したように小泉鉄<sup>(14)</sup>訳の『ノア・ノア』は、明治45年（1912）『白樺』第三卷第一号から、大正元年（1912）の第四卷第十号まで断続的に連載され、大正2年（1913）『白樺叢書』の一冊として刊行された。この訳本とゴーギャンの絵画作品によって、画家ゴーギャン

とそのタヒチでの生活は当時の日本の芸術界に大きな影響を及ぼした。岡谷公二はこの影響を以下のようにまとめている。

彼（小泉鉄一筆者注）はフランス語がまったく解さず、これは独訳からの重訳であった。フランス語の原文とひき比べてみると、小泉の訳は、省略、遺漏、誤訳が多く、決してよい訳ではないが、それでも、上野山清貢をはじめ、多くの画家たちがこの訳に酔ったのである。

ゴーギャンの作品と、その『ノア・ノア』が広く紹介された時期に接して、南洋群島が日本の委任統治下に入ったことが、多くの画家たちに南海の夢を抱かせたのは確かだ。<sup>(15)</sup>

小泉の訳は重訳であるにもかかわらず、ゴーギャンに憧れを持った当時の日本の画家たちに好まれていた。彼の作品と『ノア・ノア』で描かれたタヒチの生活の影響は、中島敦の親友彫刻家の土方久功の南洋行きの四つの動機の一つであった<sup>(16)</sup>。

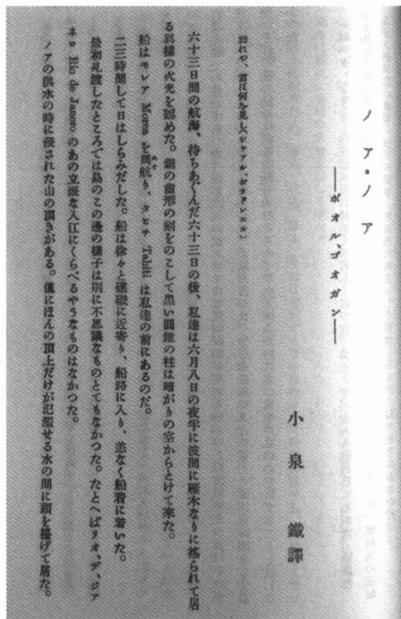


図1 『白樺』に連載した『ノア・ノア』

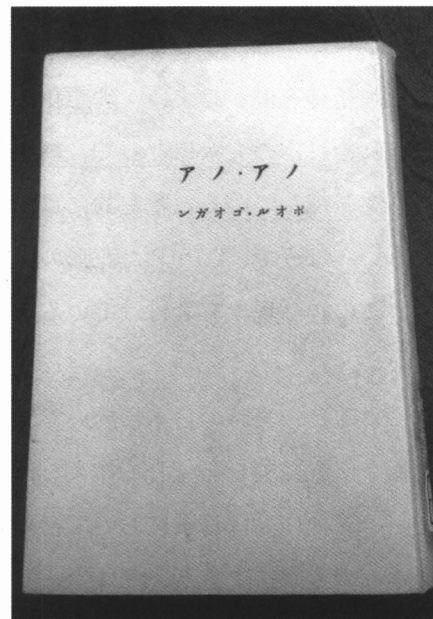


図2 「白樺叢書」として出版された『ノア・ノア』

ゴーギャンの作品が日本で展示されるとともに、『ノア・ノア』のフランス語からの翻訳は大正末年（1926）に前川堅市によって完成された。前川は「序」<sup>(17)</sup>において翻訳の詳細を以下のように説明している。

この翻訳に用いたジ・クレエ社に依る一九二四年の決定版には、モオリスの修正したゴオガンの紀行とモオリス自身の詩が、交互に章を交へてある。然し訳者は、そのモオリスの詩を全部除くことにした。それは、若しゴオガンの紀行を、その絵画の題材に関する文学的作

品とすれば、モオリスの詩は、ゴッガンの絵画、ひいてはその「ノア・ノア」の説明的詩歌と解すべく、従って読者自身も亦それに依つて各々自分の詩を見出されるであらうと思つたからである。

前川は『ノア・ノア』をゴッガンの絵画の題材に関する文学的作品と見なし、翻訳をした。昭和7年（1932）、前川の訳本は岩波文庫に入り、発行された。そのため、前川が訳した『ノア・ノア』は、当時の日本において画家たちだけでなく、一般的な知識人にも知られていたことは想像に難くない。翻訳された『ノア・ノア』はゴッガンの絵画と相まって、南洋楽園であるタヒチのイメージを日本に広めていった。

### 三 ゴッガンの素朴な南洋生活に憧れた中島敦

年譜によると、中島敦は大正13（1924）年頃、ヴェルレヌ・ハイネ等の詩を愛誦していた。また彼は東西の思想家や芸術家たちに傾倒し、その憧れを詠嘆した。それらの歌は昭和12（1937）年頃出来上がった歌集『遍歴』に収録されている。五十名ほどの有名な人物の中には、画家はたった二人しかいない。それはゴッホとゴッガンである。

ある時はゴッガンの如<sup>なま</sup>違しき野生のいのちに触ればやと思ふ

中島敦はこの歌を通じて南洋への志向を表明している。それはゴッガンと同様に、まだ文明に染められない原始的な世界に投身し、素朴な土人たちとともに生活を送りたいという願望の表明である。

また、彼は南洋から帰国した後に書いた『真昼』という作品においても、ゴッガンについて言及している。

お前が南方に期待してゐたものは、こんな無為と倦怠とはなかつたはずだ。それは、新しい未知の環境の中に己を投出して、己の中にあつてまだ己の知らないでゐる力を存分に試みることだつたのではないのか。更にまた、近く来るべき戦争に当然戦場として選ばれるだらうことを予想しての冒険への期待だつたのではないのか。

（中略）怠惰でも無為でも構わない。本当にお前が何の悔も無くあるならば。人工の・欧羅巴の・近代の・亡霊から完全に解放されてゐるならばだ。ところが、実際は、何時何処にいたつてお前はお前なのだ。銀杏の葉の散る神宮外苑をうそ寒く歩いてゐた時も、島民どもと石焼のパンの実にむしゃぶりついてゐる時も、お前はいつもお前だ。少しも変りはせぬ。

ただ、陽光と熱風とが一時的な厚い<sup>ヴェイル</sup>面被をちよつとお前の意識の上にかぶせてゐるだけだ。お前は今、輝く海と空とを眺めてゐると思つてゐる。あるひは島民と同じ目で眺めてゐると自惚れてゐるのかも知れぬ。とんでもない。お前は実は、海も空も見ておりはせぬのだ。ただ空間の彼方に目を向けながら心の中で Elle est retrouvée! — Quoi? — L' Éternité. C'est la mermêlée au soleil. (見付かつたぞ! 何が? 永遠が。陽と溶け合つた海原が)と呪文のやうに繰返してゐるだけなのだ。お前は島民をも見ておりはせぬ。ゴーガンの複製を見ておるだけだ。ミクロネシアを見ておるのでもない。ロティとメルヴィルの画いたポリネシアの色褪せた再現を見ておるに過ぎぬのだ。

『真昼』は中島敦が南洋から帰国後に書いた南洋物の一つであり、中島敦が南洋にいた時の矛盾をリアルに伝えている。それは南洋に期待したものと実際に南洋に行った後に味わった失望である。中島敦の期待は南洋における己の活躍—スティーヴンソンのような戦争における冒険とゴーギャンのような逞しい野生の命に触れることである。戦争における冒険はスティーヴンソンの南洋における政治活動に影響されたものである。一方、野生の命に触れることはスティーヴンソンではなく、ゴーギャンの影響を受けたものである。これについて、スティーヴンソンとゴーギャンの南洋生活を比較すれば明瞭である。

ゴーギャンは療養のためにサモア島に定住したスティーヴンソンと異なり、ヨーロッパの腐敗した文明から逃れるため、タヒチ島に行き、しかも島民の女性と結婚してそこで余生を送った。そのタヒチ行きの目的についてゴーギャンは以下のように述べている。

このパペエテの生活は、すぐには重荷になつて来た。其処は、依然として歐洲なのだ。私が脱れて来たと信じてゐる歐洲そのまゝなのだ。殖民地風の軽佻な空気、滑稽にさへ思はれる幼稚にして奇怪な模倣、それらが今も尚次第に増して行くやうな國なのだ。私が、こんなに遠く、遙かに探し求めて来たのは、こんなものではなかつた。

#### — 『ノア・ノア』 第一章

スティーヴンソンは家族のためにサモア島で土地を購入し、別荘を建て、島民の使用人も雇っていた。これに対して、ゴーギャンは妻をフランスに残したまま、一人でタヒチに渡航し、文明に侵蝕されていない原始社会に生きたかった。

パペエテを去つて、私は、歐羅巴の中心から遠ざかることにしよう。私は、荒涼たる原野に、土人と共に、彼等と同じやうな全然自然の生活をすれば、忍耐に依つて、彼等の疑ひを晴らすことになるだらう。またきつと、それは「出来る」のだ。



(中略)

私は、この半白の女は、あらゆる欧洲人との接触の為に、殆ど自分の種族を忘れ、その白人との差異を忘れて了つて、私の知りたいと思つてゐることを何も教えて呉れず、私の望んでゐた特殊な幸福を与えることが出来ないと思つてゐた。だから私は考えた。もつと内部に入つて、田舎の方へ行けば、自分の求めてゐる人間を見つけられるだらう。それにはただ選び出しさへすれば好いんだ。田舎は都会じゃないんだから…

一同上

スティーヴンスンは島民の権利のためにサモア島の紛争に身を投じ、島民から信頼と敬愛を得たが、ゴーギャンは芸術家として芸術上のインスピレーションを獲得するため、土人として生活を送ることにした。彼は賑やかなパペエテを離れ、山と海の間にはブラウオ木造の小屋を見つけ、そこに住むことにした。

空と私との間には、蜥蜴の住むパンダヌスの葉で葺いた軽く高い屋根があるだけだ。私は、深い眠りに落ちながら、上にある広々とした空間、蒼空、群星などを想ひ描く事が出来た。私は、あの牢獄のやうな欧羅巴の家々から、遙かに遠く来てゐるのだ。このマオリイの小舎は、生命、空間、無限などの個性を少しも遮らず、消さない。

一同上

ヨーロッパにおける立派な建築と比べ物にならないタヒチ島の小屋は、粗雑であっても、「生命、空間、無限などの個性」を消さないものである。これは文明を嫌悪する近代人が求めている境地ではないか。ゴーギャンは身を以て素朴でありながら真摯な原始社会に入っていく。このやうなゴーギャンは当時の社会に及ぼした影響について岡谷は以下のように記している。

ゴーギャンの作品と生き方とは、その後の絵画、彫刻に、いや、芸術を超えて、その後の人々の精神世界に大きな影響を与えた。それは彼が、これまで西欧社会のひそかな底流であつたものに、ひとつの決定的な形を与えたからである。<sup>(18)</sup>

ゴーギャンの生き方は彼の作品と共に当時の人々を驚かせ、魅了していた。中島敦も和歌においてゴーギャンの「如逞しき野生のいのち」に対して憧れを寄せていた。しかし、考察してきたやうに、南洋におけるゴーギャンの生き方は療養のために南洋に移住したスティーヴンスンと異なっている。すなわち、中島敦が南洋に期待したのはスティーヴンスンより、ゴーギャンのやうに南洋の島民と共に素朴な原始社会を体験することである。

## 四 『ノア・ノア』と『光と風と夢』

『光と風と夢』において、ゴーギャンの南洋生活に影響された中島敦は、『ノア・ノア』に描かれたゴーギャンの生活ぶりを『光と風と夢』に取り入れた跡が見られる。

### 1 伐木作業

『光と風と夢』において、ステイーヴンソンは山の中に入り、一人で伐木作業をしながら幸福を考える場面は印象的である。

一八九〇年十二月××日

(前略) 午後は又、植物共のあらわな生命力との無言の闘争。こうして斧や鎌を揮つて六片<sup>ペン</sup>分も働くと、私の心は自己満足でふくれ返るのに、家の中で机に向つて二十<sup>ポンド</sup>磅稼いでも、愚かな良心は、己の怠惰と時間の空費とを悼むのだ。之は一体どうした訳か。

働きながら、ふと考へた。俺は幸福か? と。しかし、幸福といふやつは解らぬ。それは自意識以前のものだ。が、快樂なら今でも知つてゐる。色々な形の・多くの快樂を。(どれも之も完全なものとなないが。) 其等の快樂の中で、私は、「熱帯林の静寂の中で唯一人斧を揮ふ」この伐木作業を、高い位置に置くものだ。誠に、「歌の如く、情熱の如く」此の仕事は私を魅する。現在の生活を、私は、他の如何なる環境とも取換へたく思はない。

—『光と風と夢』(二)

これは“*Vailima Letters*”<sup>(19)</sup>の1890年12月2日の日記によるものである。本文は以下の通りである。

CHAPTER I

IN THE MOUNTAIN, APIA, SAMOA,

MONDAY, NOVEMBER 2ND, 1890

(前略) and up that, with my wood knife, I set off alone. It is here quite dry; it went through endless woods; about as broad as a Devonshire lane, here and there crossed by fallen trees; huge trees overhead in the sun, dripping lianas and tufted with orchids, tree ferns, ferns depending with air roots from the steep banks, great arums —I had not skill enough to say if any of them were the edible kind, one of our staples here! —hundreds of bananas —another staple —and alas! I had skill enough to know all of these for the bad kind that bears no fruit.

原典と照らし合わせてみると、『光と風と夢』における「熱帯林の静寂の中で唯一人斧を揮ふ」という場面設定は、“Vailima Letters”に依っているが、この伐木作業がもたらした快樂や幸福感などは原典と一致しない。しかし、このような心境は『ノア・ノア』に見られる。

私は、どんな神聖な野蛮性からか知らないが、自分のうちに満ち満ちてゐた幸福の熱情を以て、その木を撃つた。私の手は、血みどろになつた。然し、私の撃つたのは、木ではない。私が打ち倒さうと思つたのは、木そのものではないのだ。私は、斧を地に置いてからも、尚他の幹の上でそれが唄つてゐるのが聞えるやうな気がした。その斧は、響き渡る音律につれて、私に、こんなことを云つてゐるやうな気がした。

森をすつかり切り倒せ、  
その芽はすでにいまはしき<sup>よみぢ</sup>黄泉の息をお前に投げかけた。  
お前の持つてゐる利己の愛を打ち毀せ、  
秋ともなれば人々の手もてロオタスの花切るやうに！

壊れて了へ、この後は、すつかり死んで了へ、文明を浴びた老人よ！私は蘇つた。或は、私の裡に純な力強い人間が生まれて来たと云ふ方が好いかも知れない。この力強い打撃は、文明並びに悪への最上の決別の辞としてふさはしいものだつた。この私の呼吸してゐる清純な空気と、廢頹的な魂の中にひそんでゐる墮落した本能とが、その対照と驚異とから、私の今すでに修得した聖なる単純な生命に不思議な魅力を与へた。この内部的経験は、換言すれば、征服を経験したことであつた。私はもう他の人間になつて了つたのだ。私はマオリイ人であり、野蛮人である。

ヨテファと私は、清澄な喜びに満ちて、バラの木—これは実にノアノアだ—の重い奴を担ぎながら小舎の方へ帰路についた。

## —『ノア・ノア』第二章

ゴーギャンは新しい小屋の近隣—若い青年ヨテファと友達になる。ヨテファはゴーギャンを案内し、二人は山の中に彫刻の材料を探していく。ゴーギャンは幸福を感じながら伐木を行う。しかもこの力強い打撃は「文明並びに悪への最上の決別の辞としてふさはしいもの」だとゴーギャンは考えている。生命に不思議な魅力を与へたことによって、ゴーギャンは自分がマオリイ人、野蛮人に変身してしまつたと感じる。しかも、この変身は彼を喜ばせている。

南洋の島民と同様の海と空を見たかた中島敦が求めていたのは、ゴーギャンのような変身ではなからうか。簡単な体力労働による精神的な幸福感の獲得はスティーヴンソンからではなく、

タヒチ島で野蛮な生活を送ったゴーギャンに依ったものである。

## 2 南洋の原始信仰

上述したように、ゴーギャンの絵画作品「現の化性」は『白樺』第三巻第六号（1912年6月）に掲載されている。また同号の「挿画の解説」<sup>(20)</sup>は、この作品の主人公はゴーギャンのマオリイ人の妻テフラであり、ゴーギャンの『ノア・ノア』はタヒチ島の原始の宗教を慕い、そこから美を感じ、創作を行ったと紹介している。

「現の化性」と関係している部分は『ノア・ノア』の第三章である。ある日、ゴーギャンは用事でパペエテに行き、夕方に帰ってくると妻テフラに約束したが、馬車が故障して翌日の朝一時頃帰ってくる。当時、ランプは消えて部屋は真っ暗である。ゴーギャンは新婚の妻が逃げ去ったことを心配してマッチを擦る。そのとき、彼の目に入った情景は以下の通りである。

テフラは、裸のまま、ちつと床の上に俯きに倒れて動かない。その眼は恐怖に大きく見開かれたまゝ、ちつと私を見凝めてゐる。然し、私がよくわからないやうだつた。私は、暫く変に不気味な気持で立つてゐた。テフラの恐怖が、私にも伝わつて来るやうだつた。そして、そのちつと見凝めた眼から、燐の灰めきが流れ出て来るやうな気がした。然し私は、テフラのこんな美しい姿を見た事がなかつた。殊に、こんなに痛ましい美を見た事がなかつた。私はこんな薄暗がりの中には、不気味な妖怪や、怪しい幻影が一ぱい満ち満ちてゐる事だらうと考へた。だから、子供の恐ろしい発作を引き起こすやうな態度を取らないやうに注意した。而かも、こんな時には、私だつて何か変なものに見えないとは限らないではないか？若し彼女が、私の心配さうな顔を見て、悪魔か幽霊か、それとも、夜をこめて満ちてゐるといふこの種族の物語にあるテュパポオ<sup>(21)</sup>とでも取るかも知れないではないか？私自身さへも、彼女が其処に本当にあるのかどうか、はつきりわかつてゐたらうか？かうした肉体的にも精神的にも迷信のある土地で、彼女を領してゐる烈しい恐怖の感情は、彼女をすっかり別な人間のやうに変へてゐた。そして、今迄見たあらゆる様子とは、すっかり違つて見えた。

### —「ノア・ノア」第三章

「肉体的にも精神的にも迷信のある土地で」育つたテフラは、深夜に帰ってきた夫の心配そうな顔を見て悪魔か幽霊かと勘違いしているのであろう。しかし、この激しい恐怖に襲われた彼女はゴーギャンにより「こんなに痛ましい美を見た事がなかつた」と賛美されている。この経験によってゴーギャンはテフラの美しい姿と悪魔テュパポオの姿がともに存在する「現の化性」を創作した。

ゴーギャンはテフラとの生活を何度も「幸福」と語っている。殊に彼女はマオリイ人の神話や

宗教、星に対する非常に広汎な知識を教えてくれるためである。テフラの語りでは、架空の事もあれば、その民族の原始宗教に関係する事もある。マオリイの信仰は他の原始宗教と共通しながらも、独特なところがある。

それは、第一に、生命の独特にして普遍的なる二つの原質を指示し、やがてはそれらを最高の融合に還元せしめんとする清澄さである。一は靈魂と知恵、即ちタアオラで、男性である。他は純粋に物質で、而もある程度まで神の肉体を構成するもので、女性、即ちヒナである。(中略)

第二に興味のある点は、マオリイ人が、月の中に、生物の終局せるを認め、而も、生命そのものではないが、物質を無限に増加して行く運動のしるしを認めてゐる事だ。(中略)

進化論、物質の融合、こうした高遠な教養の証左を、この古代食人種の思想の中に発見して感動しない人があるだろうか？

#### — 『ノア・ノア』 第四章

まだ原始的で未開の地と見なされた南洋には、このような高遠な教養に裏付けられる原始宗教を信仰する人種がいる。神秘的な色彩に染められた土地はゴーギャンを強烈にひきつけていた。『ノア・ノア』においてゴーギャンはタヒチ島の素朴な生活ぶりと彼らの原始宗教とともに、タヒチ島の政治的な秘密結社の制度、アレオイ人の人身御供の風俗、国王の即位式、大漁の場面なども興味深く記述し、彼らの生活に大いに賛美する。

一方、中島敦は『光と風と夢』の中でスティーヴンスンの使用人の一人—巨漢ラファエレの話<sup>1</sup>を以下のように述べている。

家畜係のラファエレと来ては、之は又典型的なサモア人だ。元来サモア人は体格がいいが、ラファエレも六呎四吋位はあらう。身体ばかり大きいくせに一向意気地がなく、のろまな哀願的人物である。ヘラクレスの如くアキレスの如き巨漢が、甘つたれた口調で、私のことを「パパ、パパ」と呼ぶのだから、やり切れない。彼は幽霊をひどく怖がつてゐる。夕方一人でバナナ畑へ行けないのだ。(一般に、ポリネシア人が「彼は人だ」という時、それは、「彼が幽霊ではなく、生きた人間である。」という意味だ。)二三日前ラファエレが面白い話をした。彼の友人の一人が、死んだ父の霊を見たといふのだ。夕方、その男が、死んでから二十日ばかりになる父の墓の前に佇んでゐた。ふと気がつくと、何時の間にか、一羽の雪白の鶴が珊瑚屑の塚の上に立つてゐる。之こそは父の魂だと、そう思ひながら見てゐる中に、鶴の数が殖えて来て、中には黒鶴も交つてゐた。その中に、何時か彼等の姿が消え、その代りに塚の上には、今度は白猫が一匹ゐる。やがて、白猫の周りに、灰色、三毛、黒、と、あらゆる

る毛色の猫共が、幻のやうに音も無く、鳴声一つ立てずに忍び寄つて来た。その中に、其等の姿も周囲の夕闇の中へ融去つて了つた。鶴になつた父親の姿を見たとその男は堅く信じてゐる……云々。

—『光と風と夢』(二)

この部分が取材した“*Vailima Letters*”の原文は1890年11月2日(月)の日記である。その原文は以下のとおりである。

—Lafaele (Rapfael), a strong, dull, deprecatory man; when he calls me ‘Papa’ in the most wheedling tones; desperately afraid of ghosts, so that he dare not walk alone up in the banana patch —see the map.

スティーヴンスンの日記では、ラファエレが幽霊をひどく怖がっていることだけは述べられている。上述したように、ゴーギャンは絵画「現の化性」において妻テフラが夜に現れる悪魔テュパポオを怖がるという南洋の原始信仰を表現している。悪魔テュパポオの話はマオリイ人達がゴーギャンに語ったものであり、『ノア・ノア』において以下のように述べられている。

この悪魔の精は、夜と共に起き出でて、眠れる人々を悩ますと云ふ。その悪魔達の都は、深い森が闇の衣をまとはせてゐる山の心にある。其処に彼等は蔓つて、あらゆる死者の精霊は、その身内の人々を荒らしに来るのだと云ふ。

—『ノア・ノア』第二章

スティーヴンスンの日記では、幽霊を怖がり、一人でバナナ畑に行けないラファエレのことは文字一行だけで客観的に描かれている。これに対して、中島敦は「夕方」という時間設定を加え、さらに墓参りに来た息子の前に死んだ父が鶴の姿をして現れるという話を創作している。中島敦の改作をゴーギャンの『ノア・ノア』と照らし合わせると、前者は後者を素材として『光と風と夢』に導入したことが明らかになる。

時間設定においては、中島敦は夜とともに姿を現す悪魔テュパポオのことに倣い、『光と風と夢』の話を夕方に設定した。また「死者の精霊は、その身内の人々を荒らしに来る」という幽霊の話は、死んだ父の霊は息子の前に鶴の姿として現れるという中島敦の改作ともほぼ共通している。したがって、ゴーギャンの『ノア・ノア』における南洋の原始信仰に関する話は、中島敦を魅了し、それをスティーヴンスンの日記の素材と結合したといえる。

## むすび

本稿では、中島敦の『光と風と夢』とゴーギャンの『ノア・ノア』との関連を具体的に検証した。20世紀の初期に雑誌『白樺』により、ゴーギャンはゴッホやマティスなどの後期印象派とともに日本に紹介されてきた。同時に、ゴーギャンのタヒチ行を記録した彼の唯一の文学作品『ノア・ノア』は、小泉鉄と前川堅市の翻訳により日本の芸術家と知識人たちに知られていた。タヒチにおけるゴーギャンの生き方及び彼の作品は土方久功や中島敦などに影響を及ぼし、彼らの南洋行を促した。そして、中島敦は和歌と『真昼』において原始的な生活を送りたかったと南洋への期待を表明した。この期待は『光と風と夢』に描写されたスティーヴンスンの南洋生活より、『ノア・ノア』において描いたゴーギャンの生活と一致している。さらに、『光と風と夢』と、その主な素材であるスティーヴンスンの“*Vailima Letters*”及びゴーギャンの『ノア・ノア』という三作を並べて考察した。その結果、『光と風と夢』は『ノア・ノア』から素材—ゴーギャンの伐木作業と南洋の原始信仰を導入し、“*Vailima Letters*”と結合したことが明らかになった。

## 【注記】

- (1) 洪瑟君「『光と風と夢』の一試論—『光』をめぐって」、『国文学攷』（200）、広島大学国語国文学会、2008年12月、pp.1-13。
- (2) 岡谷公二『南海漂蕩—ミクロネシアに魅せられた土方久功・杉浦佐助・中島敦』、富山房インターナショナル、2007年11月29日。
- (3) 洪瑟君「中島敦『マリヤン』論—島民に投影された作家の自己イメージ」、『国文学攷』、広島大学国語国文学会、2009年9月、pp.1-15。
- (4) ポール・ゴーギャン著、前川堅市訳『ノア・ノア』、岩波書店、1932年2月25日。  
「ノア・ノア」はマオリイ語で香氣ある、芳しいなどの意味である。
- (5) 本江邦夫「図版 解説」、『アート・ギャラリー』（現代世界の美術 4 ゴーギャン）、集英社、1986年4月10日、p.48。
- (6) 同上、p.59。
- (7) 前掲注（3）「南の思想に生きたゴーギャン」、前掲注（5）大岡信「高貴なるものの現存—ゴーギャンのタヒチ」を参照。
- (8) 柳宗悦「革命の画家」、『白樺』（第三巻第一号）、1912年1月、p.3。
- (9) 記者「挿画の解説」、『白樺』（第三巻第六号）、1912年6月、p.95。
- (10) 岡部あおみ「大原美術館コレクションの起源—日本の近代美術館の原型—」、『大原美術館紀要』（1）、大原美術館、2001年11月5日、p.58。

- (11) 同上、pp.56-57。
- (12) 『白樺』は何回も版画展覧会を開き、ゴッホ、ゴーギャンの絵の複製などを展示していた。小田切進『現代日本文芸総覧（補巻）』（明治文献、1973年8月25日）を参照。
- (13) 前掲注（10）、p.59。
- (14) 東大の哲学科中退で、美術も詳しい。『白樺』にはほとんど毎号、小説、随想、翻訳などを発表し、編集にも参画している。一時期は雑誌の中心人物の一人である。前掲注（2）を参照。
- (15) 『『ノア・ノア』に魅せられて』、前掲注（2）、pp.20-21。
- (16) 前掲注（2）、p.19。
- (17) 前掲注（4）、p.1-2。
- (18) 「南方行の系譜」、前掲注（2）、p.9。
- (19) Robert Louis Stevenson “Vailima Letters”、<http://www.gutenberg.org/ebooks/387>。
- (20) 前掲注（9）。
- (21) テュパポオは悪魔のことを指す。前掲注（4）『ノア・ノア』（第二章）を参照。

（山口大学大学院東アジア研究科、山東農業大学日本語学科講師）